

編集後記

今回の月報では、苦難と社会統合の関係について書かれた川上修三先生の論文をお届けいたしました。

論文中では、今年3月に日本で起きた未曾有の大地震、東日本大震災が意識されており、そこで被災された現地の人びとや地域に対する先生の思いを感じつつも、それを乗り越える（あるいは乗り越えてきた）相互扶助の可能性を多面的に検討、かつ追求しようとするスケールの大きな内容となっています。まずは柳田國男や宮本常一による、人間が自然と直に向き合いながら生きていた時代からの相互扶助論に始まり、次には宗教等に見いだされる神義論を通して人びとが苦難を乗り越え、相互扶助活動が促される局面について、マックス・ウェーバーや折口信夫らを取り上げての分析、さらには混迷した社会と人を結びつけ直すために、先人たちはどう考えたのか、まさにここは先生のご専門である社会学の始祖、サン・シモンとオーギュスト・コントの思想に再検討を加えての社会統合についての考察となっています。最後にはサンフランシスコ大地震やメキシコシティ大地震といった被災を経験した地域のその後の相互扶助、社会統合に関する興味深い例などが紹介されており、論文全体を通して、これは被災地へのエールでもあるのだ、という印象を読者の皆様は持たれることでしょう。 (HH)

執筆者紹介

川上 周三 人間科学部教授

専修大学人文科学研究所月報

第254号 (2011. 11. 30)

〒214-8580 神奈川県川崎市多摩区東三田2-1-1

専修大学人文科学研究所

発行者 小山利彦